

連載：原点

「夢への一筆書き」

佐原高等学校 小山 博之

「先生はなぜ数学の先生になろうと思ったのですか？」

これは、自分の進路に迷っている生徒と話をしていると、度々聞かれる質問です。

大学院在学中に千葉英和高校で非常勤講師を1年間、柏井高校と佐原高校で特別臨時的任用講師を各1年間、そして今年、初任教諭として引き続き佐原高校に勤めています。佐原高校は北総の名門として知られるように、千葉県の都心部からは離れているものの、伝統・文化を継承し、地域の進学校として親しまれる学校です。その為か、学校全体で生徒の面倒を見る姿勢が強く、早朝や土曜日の課外補講、休日に行われる多くの模試、OB 夢授業や大学模擬授業といった進路行事があり、生徒の夢の発見とその実現に向けての体制が整っています。その中でも、私が佐原高校に赴任してから「さすが、進学校だな」と最も感じたのは、先輩の先生方の教材研究とその授業を拝見させて頂いた時でした。授業中の生徒の引き付け方、数学への食いつかせ方、積極的に思考をさせる発問、数学の概念を分かりやすく伝える技術など、授業力の高さには驚かされました。もちろん、そのレベルの高い授業を裏付けるのは、生徒の理解を考え時間をかけ、しっかりと計画された教材研究があるからに他なりません。数学科で雑談のように繰り広げられる、教材研究の会話の時間は、初任の私にとって大変有意義で楽しい時間です。嬉々として数学を語る先輩の先生方からは、数学を楽しむ姿勢と、そしてなにより数学の教員としての誇りを感じることができます。

冒頭の質問に対して答えるとき、私はひとつの問題を生徒に提示します。それは、「ケーニヒスベルクの橋」として知られる一筆書きの問題です。私がこの問題と出会ったのは、中学3年時の数学の教科書の巻末部分でした。この問題に解答がついていなかったことが、私の挑戦意欲をかき立てました。人から与えられた問題ではなく、自分で問題を見つけ、そして、ひとつの問題について何日もかけて考え、解く。この経験は大変貴重なもので、私に数学の魅力を気付かせ、そして将来の夢につながるきっかけを与えてくれました。

将来にやりたいことが分からない子どもたちが多くいます。昔からそういうものなのか、それとも、最近になって増えてきたことなのか。どちらなのか私には分かりませんが、今の社会は夢を見つけにくいのかな、と思うことはあります。キャリア教育が浸透し、学びの目的を“進学の為”ではなく“生き方・在り方の為”であると生徒自ら捉えられるようになれば、数学がもつ面白さに気づくことのできる心の余裕ができると思っています。

自分自身が好きなことを仕事にできた存在だからこそ、日々の授業や会話の中で、数学の面白さを少しでも伝え、そしてこの仕事を楽しんでいる姿を見せることが、私の教員としての在り方なのだと考えています。数学の先生になった理由。たった一言…

「数学が好きだから。その魅力を伝えたくて。」

「明るく元気に丁寧に」

勝浦若潮高等学校 石山 泰吉

私が教員になろうと思ったのは中学生のときでした。小学校の友達に私が数学の教員になっていることを言ったら、みんな驚く…いや信じてもらえないと思います。私は小学生のとき、全く勉強ができませんでした。特に算数なんて大嫌いで、割合や道のりの問題はさっぱり理解できませんでした。自分にとって自慢できた事は、サッカーや野球が得意で、明るく、健康だったことぐらいでした。しかし、中学生のとき勉強を教えてくださいました先生方が、とても分かりやすく親切に教えてくれて、勉強することが楽しくなりました。私もこのような教師になりたいと思い、ずっと教師になることを夢見てきました。

月日が経ち、私は東京理科大学理工学部数学科に入学しました。大学の数学はとても難しく挫けそうになったことも多々ありましたが、友達と一緒に勉強し情報を共有することによって何とか乗り越えることができました。

大学生活では4年間ずっと同じ塾で講師のアルバイトをしていました。主に中学生や高校生の個別指導で数学を担当していました。思っていたより数学が苦手な生徒がたくさんいましたが、数学が苦手な生徒にはひとつずつ丁寧に教えてあげるにより、だんだん成績も上がり生徒は喜んでくれました。また、明るく元気に生徒と関わる事によって生徒も元気になる塾に行くのが楽しいし、勉強するのも嫌いじゃなくなったと言ってくれた時はとても嬉しかったです。このとき、憧れの先生に一步近づけた気がしてとても自信になりました。

大学を卒業し昨年、私は臨時的任用講師として市原緑高等学校で勤務しました。今まで自分が過ごしてきた学校生活では見たこともないような学校でした。生徒を指導する際になかなか言うことを聞いてもらえず悩みました。まるで私と生徒の間には大きな壁があるようでした。まずは、生徒と仲良くなろうと思い、私は生徒とコミュニケーションをとることにしました。コミュニケーションをとることによって生徒たちも徐々に話してくれるようになり、少しずつ言うことを聞いてもらえるようになりました。

昨年、市原緑高等学校の多くの先生から教員採用試験のアドバイスをもらい、合格することができました。現在は勝浦若潮高等学校の教員として勤務していますが、塾講師の経験や臨時的任用講師での経験を活かして、数学を教える際に丁寧に分かりやすく教えることや、生徒とコミュニケーションをとることを心がけています。これから長い教員生活が続きますが自信を持って日々精進していきたいと思っています。

「教員になって思うこと」

市川工業高等学校 田代 宗一郎

小学校5年生の頃だった。当時通っていた塾の講師に試験の出来を褒められ、私は本格的に算数を好きになった。その講師を喜ばせようと、あるいは褒められようとして、私は毎週行われていた試験で良い結果を残そうと努力した。今になって思うと、その講師がいなければ私は算数・数学を好きになっていたかどうかかわからないし、また、こうして数学の教師をやっているということもなかったであろう。今も思い起こすのは、その講師の笑顔であって、そこが数学教師としての私の原点であると思う。

しかしながら、私は教育ではなく医学の道を志した経緯があり、高校卒業後もそちらの学部に進学した。大学病院や個人病院などで実習しながら思ったことは、臨床医学を生業にするだけの技術や素質は残念ながら私にはないということで、次第に興味も失せて行ったことを憶えている。そんな大学時代のアルバイトで数学を教える機会があり、私は数学教育に関心を高めた。また、おざなりに行われている進路指導（キャリア教育も含める）を変えたいと思った。私のように進路で迷う子供の助けになりたいと思ったのだ。

紆余曲折を経て、私は今、市川工業高等学校で教鞭をとっている。本校では戸惑うこともしばしばで、学習指導や生徒指導など多方面で苦勞が絶えない。数学に限って語れば、小学校算数科の学習内容もおぼつかない生徒がたくさんいて、中々授業が進まないことにやきもきすることがある。高校生相手の授業で分数の計算方法を教えるし、極端な例でいえば、二桁の数字の加法減法も出来ない生徒がいて、筆算のやり方を丁寧に教えたこともある。生徒間の学力差が大きいため、すべての子供たちが理解できるような授業はどのようにすればよいのかと日々模索している最中である。

しかし、苦勞だけではない。私の指導が彼らの理解に結びついた時、彼らは非常に良い反応をくれるし、「先生、教えてくれてありがとう」と素直に言ってくれるのだ。私とコミュニケーションを取ろうと、授業前後で私の周りに寄って来てくれることも非常にありがたい。また、私が作成したプリントを一生懸命やり、自宅でも勉強するからプリントをたくさんくださいと願い出てくれたことも嬉しかった。こちらが本気になればなるほど、彼らも本気で勉強に取り組んでいくことを、この1学期に目の当たりにした。そんな時にふと思い出すのである。あの塾講師の笑顔を――

どんな人間だって他人から褒められれば嬉しいものであるし、期待に応えようと努力する場面が多いと思う。その小さな努力の芽を大木になるまでしっかりと育てていくことが教師の務めではないかと思っている。教師が変われば子供も変わる。彼らの笑顔のために教師は粉骨砕身、努力を重ねなければならない。そして、子供たちが笑顔になった時、私たち教師も心から笑顔になれるものだと思っている。来年はおそらくクラス担任となり、さらに厄介な問題が身に降りかかることだろう。しかし、私は生徒と常に一緒にあり、努力できる教師でありたい。生徒の気持ちを余すことなく大切にできる教師を、私は目指す。